

## 市長賞

# るりいろ 瑠璃色の釣竿

風吹柳花

『見波町まで あと10km』

通り過ぎる道路の看板を見ながら、僕は小さくため息をついた。車に揺られながら、もう何時間がたっただろう。外の景色を見ることにも飽きてしまった。目的地までまだ10kmもあるなんて、この退屈をどうやってつぶせばいいのかわからない。ゆううつな気持ちに僕の心に広がっていた。

「もう少しで着くわよ。着いたらすぐに着替えてちょうだいね、湊真、碧」

前に座っている母さんに呼ばれて、僕ははいともいいえともつかない返事をした。妹の碧はなんだかソワソワしながら僕の方を見ている。ちらりと隣を見ると碧は少し目をそらしたけれど、しばらくしてはっきりと向き直って僕に問いかけた。

「ねえ、ほんとにおじいちゃん死んじゃったの？」

「そうだって言ってるだろ。昨日ばあちゃんから電話がかかってきて言ってたじゃん。何回聞いたら気が済む



んだよ」

「だって……」

碧は困ったような顔をした。信じたくないという表情だ。けれどそんな目で僕を見られても困る。僕だってまだ信じられないっていうのに。

「着くまで寝るから、ほっといてよ」

そう言っ、僕は妹とは反対側に体を向けて目をつぶった。もちろん眠れるはずもないけれど、ただ寝たふりをした。今は誰からも声をかけられなかったから。

じいちゃんが亡くなったという電話が僕の家にかかってきたのは、夏休みが始まってすぐのことだった。

じいちゃんと最後に会ったのは一昨年の冬だ。うるさいくらいに大きな声で笑っていたし、魚をたくさん持ってきてごちそうしてくれた。

じいちゃんは昔からずっと漁師をしていたそうだけれど、僕たちが会いに行った頃にはもう船には乗っていなかったんだと後から聞いた。肺かどこかの病気が悪くなって、とうとう亡くなってしまったんだそうだ。

(やっぱり、信じられない)

目を閉じたまま、じいちゃんの顔をできるだけはっきりと思い出してみる。

すぐ日に焼けていて、体が大きくて、ニカッと笑うと白い歯が見える人だった。船に乗っているところを見たことはないけれど、大きな魚を包丁でさばいている姿には迫力があつた。

そんなじいちゃんがもういないなんて、何かの嘘なんじゃないかと思ってしまう。お通夜と葬式の連絡があったから、僕はなぜだか気持ちがささくれ立っていて、誰とも話をしたくなくなっていた。

本当なら、じいちゃんの家に行くのは8月の予定だった。それが急に7月の終わりに行くことになったから、

僕の夏休みの計画は大きく変わってしまった。

今日はテレビのスペシャル番組を見たかったし、明日には夏祭りの花火大会がある。花火大会には友達はやの斗とと一緒に行く約束をしていたのに。

(でも……)

心の中で、僕は大きなため息をついた。颯斗とは、夏休みに入る前に学校でケンカをしてしまったのだった。そのまま夏休みになってしまったから、仲直りなんかしていない。今になってみれば、ものすごくくだらないことが原因だったと思うけれど、僕は謝る気にはなれなかった。このままじゃ、きっと花火大会になんて行けなかっただろう。

僕はもう一度、今度は心の中ではなく大きなため息をついた。

突然死んでしまったじいちゃんも、ケンカ別れたままの颯斗も、僕に何でも聞いてくる碧も、みんな僕の心をぐしゃぐしゃにする。もう全部どうでもいいやという気分で、僕は窓ガラスに頭を軽くぶつけてみた。

じん、と小さな痛みが広がって、まぶたの裏に火花が見えた。

じいちゃんの家に着くと、黒い服を着たばあちゃんが出迎えてくれた。

ばあちゃんは、前に会った時よりもなんだか小さく見えた。僕より背が低くなってしまったみたいだ。少しだけ胸の奥がずきりと鳴った。

僕たちもお通夜のための喪服に着替えて、じいちゃんのいる部屋に向かった。シャツの首元が少し苦しい。僕は父さんたちの一番後ろについて、できるだけゆっくり歩いた。できればこのまま廊下がずっと続いてくれればいいのと思いいながら。

じいちゃんは真っ白な着物を着せられて、真っ白な布団の上に寝ていた。本当に、寝ているだけのように見



えた。呼んだら目を開けて起きてくるんじゃないかと思った。でも、僕の声は喉の裏側に貼り付いたまま出てこなかった。じいちゃんの顔に触れてみようとしたけれど、いけないことのような気がしてやめた。

「湊真もお焼香してちょうだい」

母さんに声をかけられて、僕は焼香台の前に座った。花の蜜を焦がしたような匂いがじわりと僕の鼻の奥にしみる。僕は大人の真似をしながら焼香をして、短く手を合わせた。お通夜の作法なんて知らないから、ちゃんとできたか心配だった。ずっとじいちゃんに見られているような気がした。

お通夜が終わったあと、ばあちゃんが僕のところへやってきた。ばあちゃんの手には長いものが握られている。た。

「これはね、おじいちゃんから湊真にとって」

僕は黙ってそれを受け取った。折りたたまれた釣竿だった。柄の部分がきれいな深海の色をしている。僕が一番好きな色だ。

手渡された釣竿をじっと見つめていると、ばあちゃんは続けて言った。

「おじいちゃんね、湊真が来たら釣りを教えてやるって言ってたのよ。湊真ももう5年生だから、一緒にできるだろうってね」

残念だったわねえ、とばあちゃんは鼻をすすった。僕は思わず、釣竿を両手で握りしめた。

こんなものもらっても、教えてくれるじいちゃんがいなくちゃ釣りなんかできないじゃないか。

僕の心は、またざわざわした音を立て始めた。悔しさと、怒りと、ほんの少しの嬉しさがごちゃまぜになっていた。この気持ちをどこへやっていいのかわからなくて、僕は握る手に力を込めた。手の中の釣竿が、ほんの少しだけ重くなったように感じた。

その夜、僕は夢を見た。

深い海の中を、僕はゆらゆらと漂っていた。あの釣竿と同じ色の海だ。不思議なことに、水の中にいるのに息苦しくはなかった。辺りを見渡すと、色とりどりの魚が気ままに泳ぎ回っていた。

魚たちに混じって、僕も泳ぎだした。群れの中に入っていたり、一番速い魚と競走したり、ずっと深くまで潜ったりした。どんなに泳いでも疲れることはなかった。誰にも邪魔されることのない海の中は、世界中のどこよりも自由だった。

ふと遠くを見ると、ぼんやりとした人の姿が見えた。誰だろう。近づいていくと、その人影は少しずつはつきりと見えてきた。

そこにいたのは、じいちゃんだった。

じいちゃんは何かを探すようにあちこち見回していた。僕には気づいていないようだ。しばらくすると、僕に背を向けて泳いでいってしまった。僕はあわてて後を追った。

じいちゃんの泳ぐ先には、大人の体よりもずっと大きな白い魚がゆったり泳いでいた。じいちゃんはそいつを追いかけているみたいだった。捕まえるつもりだろうか。あれはなんて名前の魚なんだろう。僕ももっと近くでよく見たい。

どんなに泳いでも、僕は白い魚とじいちゃんに追いつけなかった。一体どれくらいの距離を泳いできたのか、僕にはもうわからなかった。じいちゃんたちはどこまで行こうとしているんだろう。このまま泳ぎ続けたら、地球を一周してしまうんじゃないか。僕はだんだん不安になってきた。

そのうちに、じいちゃんの後ろ姿が少しずつ遠くなっていった。僕がどんなに必死に泳いでも、じいちゃんはどんどん小さくなっていく。僕は焦り始めた。このままじゃ、追いつくどころか見失ってしまう。

「じいちゃん！」

僕は思いきり叫んだ。声が届いたのか、じいちゃんは振り返ると僕に向かって大きく手を振り、口を動かし



て何かを言ったように見えた。けれど、僕にはじいちゃんの声が聞こえなかった。じいちゃんはまた白い魚のいる方に進んでいった。

「行くなよ、じいちゃん！」

もう一度、さっきより大きな声で僕はじいちゃんを呼んだ。じいちゃんはもう振り返らなかった。焦りと悔しさが僕の胸を締め付けた。

その瞬間、海が大きくうねった。バランスを崩した僕は、宙に投げ出されたような格好になった。

そしてどこからともなく現れた銀色の魚たちが僕の周りを取り囲んだ。とても数え切れないほどの大群だ。魚たちは海面に向かって一斉に素早く泳ぎだし、僕は魚たちが作った渦に吞まれてものすごい勢いで運ばれていった。魚たちからぼろぼろとはがれた銀のうろこがプリズムのように輝き、まるで宇宙旅行をしているみたいに無数のきらめきが僕の視界に飛び込んできた。

じいちゃんも白い魚も今はもう見えない。僕の体はどんどん押し上げられていった。じいちゃんのいる方へ手を伸ばしてみても、銀色の魚の群れが分厚いカーテンのように僕とじいちゃんのあいだをさえぎってしまった。もうどれだけ大声で叫んでも声が届くような距離じゃなかった。

気がつく、僕は海面にぶかぶかと浮かんでいた。銀色の魚たちは、いつのまにかいなくなっている。夜の海はおどろくほど静かで、星のまたたく音すら聞こえてきそうだった。

この世界で、僕はひとりきりになってしまったのかもしれない。そんなことを考えて、僕はうつすらこわくなった。いやな気持ちを振り払うために、海の中で手を振っていたじいちゃんのことを思い出してみた。

じいちゃんはある時、なんて言っていたんだらう。僕にはわからなかった。けれど、たしかにじいちゃんは笑っていた。僕の知っている、よく晴れた夏の日のような笑顔だった。

思い出しながら、僕も笑ってみた。じいちゃんがすぐそばにいるような気がして、こわさはだんだん消えて

いった。

おだやかで優しい波が、僕の体を繰り返しゆすっていた。見上げた空に散りばめられた星は、銀のうろこのようにきらきらと輝き続けていた。

次の日、僕たちはじいちゃんに最後の挨拶をした。

じいちゃんの棺には、家族全員できれいな花をしき詰めた。碧はぐすぐす泣いていた。ばあちゃんも母さんも涙ぐんでいたし、父さんが鼻をすすり上げているところも見た。泣いていないのは僕だけだった。どうしてか、泣いてはいけなような気持ちで僕は葬式の場に立っていた。

花を棺に入れるとき、僕はじいちゃんの顔にそっと触ってみた。昨日はできなかったけれど、今なら大丈夫だと思ったからだ。

じいちゃんのほったたは、おどろくほどひんやりとしていた。夜の海の底も同じくらいに冷たいんだろうな、と僕は思った。死んでしまった人の体が、こんなに冷たくなってしまうのだと僕は初めて知った。悲しみとも違う、大きな何かを心に刻み込まれた気がした。

朝からとても蒸し暑い日だった。ほんの少し外に出るだけで、汗がじわりとしみ出てくる。喪服のシャツはやっぱり首が苦しくて、けれどボタンを外しても、この息苦しさは変わらないような気がしていた。

じいちゃんの棺は火葬場に運ばれていき、僕たちもそこへ一緒に向かった。火葬のあいだ、僕たちはジュースを飲みながらじいちゃんが帰ってくるのを待っていた。暑くてからからになりそうだった僕の体に冷たいジュースがしみ渡り、生き返るような心地がした。けれど、じいちゃんのことを思ったらなんだかばつの悪い気分になってしまった。



僕は落ち着かない心持ちで窓の外へと目をやった。小高い山の途中にあるこの火葬場からは、小さな港町と海が見下ろせる。そこからさらに遠くには、海と空の境目があった。

あの青と青がぶつかるところまで、きつと夢の中でなら泳いでいたんだろうなと僕は思った。太陽の光を映してきらめく水面の下には、じいちゃんを連れていったあいつもいるんだろうか。誰にもつかまることなく、どこまでも遠くへ泳いでいくあいつが。

夢で会ったじいちゃんが最後になんて言ったのか、何度考えても僕には答えを出せなかった。笑顔で手を振りながら遠くへ行ったじいちゃんの姿を思いながら、僕はくちびるをぐっと嚙んだ。

火葬が済んで出てきたじいちゃんは、骨だけになっていた。じいちゃんの骨はちんまりとまとめられていて、これが本当にじいちゃんだったのかもわからなかった。あんなに体の大きかった人がたったこれだけの骨になってしまっただなんて、僕にはとても信じられなかった。

「おじいちゃんの骨、貝がらみたい」

すっかり姿が変わってしまったじいちゃんをまじまじと見ながら、碧がぼつりとつぶやいた。くすんで灰色がかった白い骨は、たしかに貝のようだった。

人間は誰でもみんな、死んだら貝のような骨になるんだろうか。それともじいちゃんが海で生きてきた人だから、死んでしまっても海とつながっているんだろうか。

ふと僕の頭の中に、尾びれを大きくゆらして泳いでいく白い魚の姿が浮かんできた。あいつの白い体は、骨になったじいちゃんと同じ色だった。けれどあいつは骨でも貝でもなく、生きて自由に泳いでいる魚なんだ。

ずるい、と僕は思った。じいちゃんだって、もっと自由に過ごしながら長生きしたかったはずだ。どうしてじいちゃんを連れて行ったりしたんだ。

じいちゃんを返してくれよ、と僕は大声で叫びたくなった。齒を食いしばってこらえたけれど、胸の中が悔



しさでいっぱいだった。

葬式から帰った僕は、着替えもせずに畳の部屋の真ん中に転がっていた。天井の木目を視線でなぞりながら、じいちゃんがいなくなった家を包むものさびしさに浸っていた。

そうしているうちに、ふと誰かに呼ばれたような気がして首を横に向けた。立てかけていた釣竿がそこにあった。僕はゆっくり起き上がり、釣竿を手にとった。しばらくのあいだ、僕は釣竿をじっくりと眺め続けていた。「いいなあ、新しい釣竿ってのは」

突然、人の声がした。振り返ると、いつのまにか父さんが部屋に入ってきていた。父さんは何かを思い出すような表情で口を開いた。

「湊真、今から釣りに行かないか？」

おどろいた。まさか父さんが釣りを知っているなんて。僕は思わず聞き返した。

「父さん、釣りができるの？」

「できるさ。もう何年もやってないけど、小さい頃からじいちゃんに教えてもらってたからな。道具さえあれば、簡単な釣りならすぐにだってやれるぞ」

言われてみれば、父さんはじいちゃんの子どもなんだから釣りくらい教わっていてもおかしくなかった。どうしてこんな単純なことに気づかなかったんだろう。なんとなく、きまりの悪い思いがした。

「さて、行くなら用意するぞ。どうする？」

「行く！」

意外なくらい大きな声が出た。どうせ釣りなんてできないと思っていただけけど、父さんが教えてくれるなら話は別だ。自分で思っていたよりもずっと釣りをするのを楽しみにしていたことに、僕は初めて気づいた。



僕はすつくと立ち上がった。これから待ち受ける初めての体験に、早く飛び込みたくて仕方がなかった。なかなか外れないシャツのボタンがもどかしかった。

見波町の漁港は、じいちゃんの家から少し歩いた場所にあった。途中の釣具屋でエサを買い、僕は父さんは港へ向かった。駆け出したくなるのをこらえて、僕は海まで続く坂道を下りていった。新しい釣竿をしっかりと握りしめながら。

港の堤防に着くと、父さんは釣りの準備を始めた。赤く染まり始めた空を映した海が、やさしい黄金色の光を放っている。おだやかなさざ波が水面をゆらすのを眺めていると、僕のたかぶった心は少し落ち着いてきた。伸ばした釣竿は僕の背丈よりも長かった。糸を軽く引っばると、竿の先がふわりとしまった。父さんは糸の先に小さな針とエサを付けて、僕に手渡してくれた。これでいよいよ釣りができると思うと、どうしようもなくわくわくした。

「これを海に沈めて、魚を待つんだ」

父さんに言われたとおりに、僕は糸の先をそつと海面に垂らした。エサの付いた針が水の中で揺れている。竿を上下に動かすと、針はぴょんぴょんとはねるように動いた。僕の心も楽しさではね回った。

しばらくすると、青い魚の影が近づいてきた。何匹かの小さな群れだった。針の周りをすいすいと泳ぎながら、エサを口でつつこうとしている。

このままながめていたらきつと逃げられてしまう。僕はあわてて、魚がエサを食べるより前に思いきり竿を振り上げてしまった。魚たちはみんな散り散りになって逃げていった。

「あーあ、逃げられた」

僕はがっかりした。もう少しだったのに、焦って魚を逃がしてしまった。釣りというのは思っていたほど簡単じゃないみたいだ。

「湊真、釣りは待つものなんだよ。魚がかかったら手ごたえでわかるから、そのときに竿を上げるんだ。大丈夫だ、次は釣れるさ」

父さんに励まされ、僕はもう一度針を海に落とした。今度こそ釣ってやる。僕の心は燃えるように熱くなっていた。

魚は、今度はなかなか現れなかった。じりじりした気持ちをおさえて待っていると、ようやくまた小さな群れがやってきた。さっきの魚たちだろうか。釣竿を握る僕の手が、緊張でじんわりと汗ばんだ。

僕のしている前で、魚たちはエサをつついていた。今すぐに竿を立てて釣り上げたくて仕方がなかった。だめだ、待つんだ。まだ、まだだ。

ふと竿の先がわずかに曲がり、ぶるる、と竿の芯が小さくふるえた。ついに魚がかかったのだ。その瞬間に僕の心もふるえた。おどろきと嬉しさで飛び上がりそうになった。

「今だ、竿を上げろ！」

父さんの合図で、僕は夢中で釣竿を振り上げた。海の中から小さな魚が飛び出してきて、僕の目の前で踊っている。銀色の体が夕陽に照らされて、宝石のように輝いていた。

「やった！」

思わず僕は叫んで、父さんを見た。父さんはニカッとした笑顔で、僕に向かってガッツポーズをした。僕もブイサインを返した。心臓がどきどきと高鳴って、ほっぺたが熱くなってくるのを感じた。嬉しくて笑顔になるのを止められない。こんな気持ちになるのは本当にひさしぶりだった。

釣りあげた魚をバケツに入れると、魚はくるくる泳ぎだした。何枚かはがれた銀のうろこが、ひらひらと舞いながら虹色に光った。

魚を眺めながら、僕は釣竿から手に伝わってきた魚の反応を思い出していた。小さな振動だったけれど、た



しかに生きた魚がそこにいるのがわかる感覚だった。

釣りの楽しさは、僕の想像のはるか上をいくものだった。たった一度魚を釣りあげただけで、これほどまでに熱くなれるだなんて思ってもみなかった。

楽しい。もっともっと釣りたい。今ならどんな大きな魚だって釣れる気がする。じいちゃんからもらったこの釣竿で。

そうして、僕はふいにじいちゃんの顔を思い出した。

じいちゃんはこのなにして楽しいことを僕に教えようとしてくれていたのか。僕のためにぴかぴかの釣竿を用意してくれて、僕と魚を釣る日を待っていたのに、それが叶う前に死んでしまったのか。

もっと早くここに来ていれば、一緒に釣りをしながら笑いあうことができたのかもしれない。今までは田舎の漁師町なんて退屈だと言ってここに来るのを面倒くさがっていたけれど、じいちゃんが生きているうちになら一日中じいちゃんと一緒に釣りができたんだ。

僕はどうしてもっと早く、じいちゃんのところに来なかったんだろう。

そんな思いが僕の中で渦をまいてふくれあがった。僕の間からは涙がぼろぼろとあふれてきた。お通夜でも葬式でも泣けなかったのに、どうして今なのか不思議だった。

どんなに目をこすっても、涙は止まらなかった。泣いている顔を父さんに見られたくなくて、僕は父さんに背を向けた。歯を食いしばって泣くのをやめようとしても、声もれるのをおさえることはできなかった。悲しみの波がくり返し僕の心に打ちつけてくるようだった。

父さんは何も言わず、僕の頭にそっと手を置いた。父さんの手は大きくて温かった。

小さな子どものようにしゃくりあげながら、僕は夕陽が沈みきる頃まで泣いた。

僕たちが家に帰る日がやってきた。

帰り支度の途中で、僕はあの釣竿を持ってばあちゃんのところへ行った。

「これ、持って帰ってもいい？」

「もちろんいいわよ。おじいちゃんも喜んでくれるでしょう」

ばあちゃんにはっこり笑いながら返事をしてくれた。ありがとうと僕は答えて、釣竿を大事に抱えた。

「湊真や碧が帰ってしまったらさびしくなるねえ」

本当にさみしそうな顔で、ばあちゃんはつぶやいた。もっとここにいたかったけれど、もう帰らなくてはならない。じいちゃんのいなくなった家でひとり過ごすばあちゃんのことを、僕は少し心配だった。

「またすぐ遊びに来るから。それまで元気でいてよ、ばあちゃん」

ばあちゃんは笑いながらも泣きそうな顔で目元を押さえた。

「めずらしいのね、湊真がこんなこと言うなんて」

母さんがおどろいたように言った。たしかに、こんなことは今まで言ったことがなかったかもしれない。けれど、これが僕の素直な気持ちだった。またすぐに、この家に遊びに来たいと僕は思っていた。

母さんの隣では、父さんが静かにうなずきながら笑っていた。釣りをした日に泣いたことを思い出すのは恥ずかしかったけれど、父さんは僕が泣いたことを他の誰にも話さないでいてくれた。男同士の秘密にしてくれたのが僕には嬉しかった。

じいちゃんとも、男同士の時間を作りたかったなと僕は思った。じいちゃんと一緒に並んで釣りをすることができなかったのは、本当に大きな心残りだった。

けれど、僕にはこの釣竿がある。じいちゃんからもらった、深い海の中を思わせる瑠璃色の釣竿が。

これさえあれば、釣りをする時はいつだってじいちゃんと一緒にいられるような気がしていた。これからはずっとじいちゃんと釣りができるんだ。じいちゃんが釣ったことのない魚だって、この竿で釣れるかもしれない。



い。

僕の心は未来への期待でときめいていた。そして、僕はこの釣竿をずっと大切にしていこうと固く心に決めた。

車のラジオから、人気歌手の歌声が聴こえてくる。颯斗が好きな曲だ。家に遊びに行ったときに一緒に聴いたこともあった。もう何日も会っていない颯斗のことを思うと僕はさみしくなった。

帰ったらまず颯斗に謝って仲直りしよう、と僕は思った。ケンカのこと、花火大会のこと。どっちが悪いかなんて、もうどうでもいいことだった。ごめん、と言えるうちにちゃんと言わなくちゃいけないんだ。言えなくなってからじゃ、遅いんだ。

それから、颯斗を誘って釣りに行こうと思っていた。もちろんあの釣竿を持って。近くの川なら歩いてすぐだし、少し遠くには池だってある。電車にのれば海にだって行ける。今まで知らなかっただけで、僕たちの街には釣りのできるところがたくさんあったのだ。

一緒に行けば、颯斗だってきっと釣りを好きになるはずだ。他の友達も集まれば、もっと楽しくなるに違いなかった。釣りなんてしたことないって言われたときには僕が教えられるように、釣りや魚のことをもっと勉強したくなった。帰ってからのことを思うと楽しみで、僕の心は弾んでいた。

じいちゃんには釣りのやり方を教えてもらうことはできなかったけれど、じいちゃんは僕にとって大事なものをたくさん残してくれた。何かをめいっぱい楽しむ気持ちも、誰かを大切にする思いも、じいちゃんが教えてくれたことだった。

そして、あの釣竿も。

じいちゃんがくれた釣竿は、僕の一生の宝物になった。これを持ってみんなと一緒に釣りに行けば、その思い出も宝物になる。そしてそのたびに、僕はじいちゃんのことを思い出すんだ。生きていた頃のじいちゃんとの思い出は少ないけれど、これから僕が釣りをしていくたびにじいちゃんとの思い出も増えていくように思えた。

そういえば、と僕は顔を上げた。僕は一番大事なことをまだじいちゃんに言っていなかった。僕は車の窓を全開にして、夏の日を浴びて光る海に向かって思いきり叫んだ。

「ありがとう、じいちゃん！」

きらり、と海が輝いたような気がした。打ち寄せる波の音が僕の耳に届く。その音に混じって、僕にははっきりとじいちゃんの声が聞こえた。

「ありがとうな、湊真」

遠くで水面が大きくゆらめいた。海のきらめきは、いよいよまぶしさを増した。まるで笑顔のじいちゃんが、大きく手を振っているかのようにだった。